

---

# 不良と優等生

撫子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不良と優等生

### 【Nコード】

N0554H

### 【作者名】

撫子

### 【あらすじ】

組織も壊滅したが灰原のミスで薬のデータを失う。それを知ったコナンは不良になってしまう。そんな二人の恋です。ちなみに時期は、小学六年生から中学生あたりです。

## ブローグ

この日は、大雨だった。

わたしたちの運命を変えた日は…

「ごめんなさい、ごめんなさい…」

大雨の中、傘を持たず、何度も謝った。

彼は優しくかったから、本当は心の中にあまえがあったかもしれない。でも、そんなはずはなかった。

「なんでだよ。お前あの薬作っただろ。だったら解毒剤くらい作れるだろ。」

そう言っつて、何度も私に頼んだ。

でも、私は、首を縦に振らなかった。

「そうかよ。」

そう言っつて、したうちをして行ってしまった。

この日は、私が江戸川君を不良にしてしまった日。

## プロローグ（後書き）

こんにちは。撫子です。

俺とあいつの恋はNEWで連載しているのでこちらを新しくリニューアルしました。話もぜんぜん違います。  
ぜひ読んでください。

## 第一話 私のせい？

あの日以来、彼は変わった。

次の日の彼は、すべての人を寄せ付けなかった。

先生もクラスメイトも…

この日は小学校の卒業式の前日だった。

ついに卒業式の日。

彼は昨日と変わらず、ただならぬオーラをもっていた。

彼が登場した時、保護者は大変驚いてた。

それはあたりまえだ。

なぜなら、オーラはよどみ、適当に歩き、

「見んなよ。」

とか保護者にいつているのだ。

そんな中、卒業式は始った。

彼はセリフも歌も何一つ声を出さなかった。

しかたないから、セリフは私がいった。

そして、卒業式最後のプログラム「校歌」が始まった。

みんな泣きながら、歌っていた。

彼は歌わなかった。

そして退場すると、みんなが江戸川君をせめた。

「なんでセリフを言わねーんだよ。」

「そうだよ、そうだよ。みんなの最後の卒業式なんだからさー。」

「あやまってよ。コナン君。」

彼は冷酷だった。

「別に関係ねーし。つかメンドクせえ。」

その言葉に対してみんなは…猛烈に怒った。

そして、クラスのある男子は殴りかかろうとした。

これは私のせい？

私が解毒剤を作れなかったから？

これが私の運命？

「もうやめて！」

私の言葉でみんなは止まった。

ツカツカと江戸川君の前に来て、

「これがあなたの選んだ道？」

彼は前に一歩出て、

「ああ、そうだ。お前のせいだな。」

彼は笑い続けた。

下を向く私を見て。

組織をぬけだし希望をくれた彼は

私のせいで

私のせいで

不良になってしまった。

## 第一話 私のせい？（後書き）

哀ちゃん視点です。

久々の投稿になりました。

プロローグを見てから、一話読んでください。  
新しくリニューアルしたので。

次回も読んでください。

## 第二話 蘭の結婚

季節は桜が散っていく季節となった。

どこもかしこも、桜の花びらが落ちている。

この日、蘭さんが結婚した。相手は同じ大学の人らしい。招待客は少年探偵団もよばれた。

だけど席は、江戸川君とはなれていた。

たぶん、彼は知っていたからか平然としていたが瞳は悲しそうだった。

式はどんどん続く。

彼の気持ちを知らず、みんなは喜んでいる。

そして、蘭さんがブーケを投げた。

そのブーケは私の手に落ちた。

「いいな、哀ちゃん。」

「あら、いる？」

「ううん、哀ちゃんの所に落ちたんだもん、だめだよ。」

「哀ちゃんおめでとう。」

「蘭さんもおめでとう。」

蘭さんも歩美ちゃんもやさしすぎる。

私には、ブーケをもらう資格もない。

私には、幸せな結婚する資格はない。

だって、彼から幸せを奪ったんだもの。

式が終わり、彼と話そうと思い彼を追いかけた。

彼は人目が見つからないところで

泣いていた。静かに。

私の胸の中にあつた罪悪感が広がる。

私最低ね。

自嘲的なえみをする。

私のほほに何かがつたった。

私はなみだをふきとった。

そう、苦しみを表に出す資格はない。

私は会場に戻った。

## 第二話 蘭の結婚（後書き）

こんにちは。撫子です。

うーむ、思うようにいかなかった…

感想、評価待ってまーす。

## 第一話 入学式と影

新入生代表は私になった。

本当は江戸川君だった。

でも、あの卒業式を見てやめたんだろう。

フー

思わずため息がでる。

もともと、私のせいなのに…

入学式は明日なのに急に新入生代表だなんてんね。

私は新入生代表の言葉を考えた。

「次は新入生代表の言葉、灰原哀。」

「はい。」

まわりはどよめく

「かわいいー。」

「超美人じゃん。」

彼女は階段を一段一段上がる。

そして、壇上に上がり、マイクを口に近づけた。

「新入生代表灰原哀。季節は桜が舞い落ちる春になりました。…この学校の伝統に恥じぬよう生活したいです。」

そう言つて原稿をたたんだ。

パチパチ

大きな拍手がわきおこった。

彼女はその拍手に対して微笑で返した。

「灰原さん最高！」

「続いて、生徒会長からの言葉。」

「はい。」

「うわーかっこいい。」

「イケメンじゃん。」

「こんにちは、新入生のみんな。ここでの学校生活が楽しくなるよ  
うになるといいです。」

「ありがとうございます。続いては…」

「灰原哀、吉田あゆみ、井上加奈子今年の新入生はいい女ばかりだ。」

男は怪しい笑みをうかべる。

「もうダーリンたら。私の事見てよ。」

女は甘えた声をだす。

男は女のあごをつかみキスをする。

「お前はこれから俺のコマだ。」

「えっ。そんな…」

「俺と一緒にいいだろう。」

女は黙るしかない。

男は女がいる部屋を後にした。

## 第一話 入学式と影（後書き）

話が進みました。

それもなんとこんな速く投稿できた  
次回も読んでください。

感想、評価よろしくお願いします。

## 第二話 初めての中学生生活

「ここは動詞になります。」

キンコンカンコン

「起立、ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

簡単な授業。

入学してから一日たった。

私と歩美ちゃんは1 - A、小嶋君と東尾マリアちゃんは1 - B、  
円谷君と江戸川君は1 - C、坂本たくま君は1 - Dだった。

「哀ちゃん、授業難しかったね。」

「大丈夫よ、歩美ちゃん。覚えるだけよ。」

「さすが哀ちゃん。」

「あなたって自慢するのが好きなんだ。」

言ったのは美人だがかわいこぶりっ子タイプだ。

もうスカートはすごい短くて第一ボタンを開けている。

リボンもユルユルでつけてはいけないシュシュをつけている。

「何言ってるの。哀ちゃんはすごいんだから。」

歩美ちゃんを抑えて

「誰？」

「井上加奈子です。」

「そう、私の悪口を言う暇があれば、勉強をしっかりとするのね。  
なにげに話の輪に入っている。」

「何よ、代打のくせに。」

「哀ちゃんカッコイイ。そういえばあの生徒会長かつこよかったね。」

「まあまあね。でも性格、運動神経が悪いかもよ。」

「それはないよ。名前は森大地。性格はやさしいんだって。運動  
神経は抜群らしいよ。」

「えっ本当！」

「うん。私、狙っているんだ。この中学一人気なんだ。」

キーンこーんカーンこーん

「二人とも席戻ったら。」

返事する暇もなく二人は席へ戻った。

### 第三話 危険はもうそばに…

帰り道、四人で帰った。

「ねえねえ、光彦君。クラスどう？」

「そうですね。なんと不良がいたんです。」

「え。」

「私たちのクラスにはギャルがいたわね。」

「うん。とても可愛いんだけど。」

「光彦、誰なんだよ。」

「コナン君なんです。」

みんなが静まりかえる。

「どうして不良になっちゃったんでしょうね。」

しんみりした口調で言った。

それは私はなの。誰にも言えない秘密。

話を変えるため歩美ちゃんは聞いた。

「元太君はどうなの？」

「みんな普通だぞ。俺の隣の子かなりやさしかったんだ。弁当わけ  
てくれたり、勉強教えてくれたり

鉛筆貸してくれたたり。」

「名前はなんていうの？」

わくわくしながら聞いている。

「えーと…橋本、ゆか？いやちがう。ゆき？えーと…」

「元太君忘れちゃったの!？」

「ひどいわね。そこまでしてくれた相手に。」

「そんな責めないでくれ。」

あたふたさせて言う。

「「「あはははは」」」

「部活はどうしますか？」

「うーん、歩美は運動部かな？」

「俺はクッキングクラブもいいな。」

「元太君は食べるだけでしょ。」

ポカ

「いてて、灰原さんはどの部ですか？」

「そうねえ、科学部かしら。」

「僕と同じですね。」

「じゃあ私たちはこれで。ジャーネー、哀ちゃん。」

「ええ、さようなら。」

いつもは江戸川君が一緒だった。

なんか悲しい。

馬鹿みたい。組織にいたころに比べて今私は幸せなはずなのに…

欲張りになってしまったみたいね。

カシャカシャ

そんな物思いにふけていたからか

この時私はシャッターの音に気付く事が出来なかった。

第三話 危険はもうそばに…（後書き）

次回も読んでください。

## 第四話 裏サイト

数日後、学校に行ったら、彼がいた。彼は冷たい瞳を向けて話しかけた。

「お前はやっぱりシエリーだな。」  
「なっ。」

久しぶりに聞いたコードネーム。彼の冷酷の目で、思い出される。組織の時代を…

「帝丹裏サイト。2000pikaiti。」  
そう言って彼は去っていった。

その夜、パソコンに帝丹裏サイトと入力し、Enterを押した。そうすると、帝丹裏サイトと一番前に表示されていた。マウスをその上に動かしてクリックした。

画面にはパスワードを入力してくださいと書かれている。私は江戸川君に教えてもらったパスワード2000pikaitiを入力した。

すると、画面には  
ようこそ、帝丹中学校の男子たちよ。  
と表示されていた。

「どういう事？江戸川君の事だから考えがあると思うけど。」  
初めて来た人 掲示板 ランキング 写真集 管理人へ  
というアイコンがある。

私はまず、初めて来た人の所へ入った。  
ようこそ、帝丹裏サイト（男子用）へ。  
もし間違えてしまったら、ここから、即刻退出をしてください。  
メニューについてはそのままである。  
お楽しみください。

「何よこれ。」

私はまず、掲示板をクリックした。  
いろいろな投稿があり、どんな女の子が好きとか、いじめとか、  
かなり下劣だ。

「最悪ね。」

ランキングを見ると

いい女ランキングとか新入生ランキングなどいろいろあった。

新入生ランキングでは1位灰原哀2位吉田あゆみ3位橋本優佳4位  
井上加奈子

「このサイトの管理者最低ね。写真集はどういう事かしら？」

写真集をクリックすると、私や、歩美ちゃんや、優佳ちゃんという  
人の写真や、加奈子ちゃんいろいろな美人の隠し撮りの写真だっ  
た…

#### 第四話 裏サイト（後書き）

みなさん、お分かりでしょうか？  
なんなのかは秘密です。

分からない人もいると思うので…  
次回もよろしく願いします。

## 第五話 複雑な心

「何よこれ……」

写真の下に名前と値段が書いてある。

「いつの間にこんなの。」

スクロールして写真が終わると、買う場合はその写真をクリックしてください。

そして、名前、学年、組を入力してください。

と書かれていた。

また、女子がこの事を学校に連絡した場合、この学校の女子の写真を世界中にばらまくのでご注意ください！  
と赤い文字で書かれていた。

夜、俺は学校の裏サイトを見ていた。

イラつく

あいつの事なんか考える必要はないのに、考えてしまう自分がいる。

そんな事を考えながら、写真を見ていた。

あの灰原が隠し撮りさせられたのか？

そんなわけないと思う自分と、そう思う自分がいる。

俺に工藤新一を失わせてしまった灰原への憎しみとなぜか守ってやりたいと思う気持ち。

そんな思いに自分は苦しめられていた。

「フー」

なんで俺こんなの見ているんだろ？

疑問が浮かび上がった。

俺はもう推理をやめたのに……

そんなときある写真が目にとまった。

「……これは！」

## 第五話 複雑な心（後書き）

今回の題名うまくきまってないよ。  
初のコナン視点でした！

## 第六話 一人目捕まえた

白い部屋に白いベット、そんな殺風景な部屋にダーツの的がある。それには、三人の少女の写真があり、名前が書いてある。

男はダーツを投げた。

そうすると一人の少女の写真にあたった。

名前は…。

「一人目捕まえた…」

次の日、

「おはようー!!」

いつもより、元気な声でした。

「あら、いつもより元気ね。井上さん。」

「加奈子でいいよ。」

「井上さん。」

「あつ森先輩。」

かなりのイケメン。

入学式のときは、前の人の背が高くて見えなかったけど背はすわりと高く、ウエストは引き締まり、工藤君並かしら。

「やあ、井上さん。えっとこの件んだけど…」

「えっとやっぱ女子中学生は…」

「ありがとう。」

そう言つて、戻つていった。

「どういう事？」

と聞くと、

「この中学校の制服と校則が変わるの！」

いろんな層から聞きたいらしくて私が選ばれたの。」  
なるほどね、ギャルの代表のわけね。

「あら、よかったわね。」

「そうそう、不良代表の子めっちゃカッコイイの

えっと名前は…江戸川コナン。今三年生の不良を倒して

トップに立ったの。女子の隠れ人気だよ」

ポーカrfフェイスが崩れそうだった。

本当だったらこの学校一の人気者になるはずだった。

薬ができる希望があるなら…

「どうしたの？灰原さん。」

「何でもないわ。」

そう言って井上さんとの話は終わった。

## 第六話 一人目捕まえた（後書き）

遅くなりました。

まだまだオリキャラ登場させます。

## 第七話 井上加奈子

六時間目、生徒会、私と歩美ちゃんは廊下に出てホールにいった。そこで目にしたのは、生徒会長と前見た橋本さんが手を組んでいっしょに行っていた。

「哀ちゃん、会長に彼女で来たって本当だったんだ。」

ちよつと残念そうな感じで歩美ちゃんは言った。

「あら、そうなの。」

「あの女ムカつくよね。」

そういつて話に入っしたのは井上さんだった。

「橋本優佳。恋人にしたい人一位。」

そう言った後

「何よあの女~~~~~」。

あたしのほうが可愛いんだから。」

そう言っでどこかへ行った。

「でも哀ちゃん。会長って橋本さんをいれて10人目らしいよ。噂だけど……」

「ふ〜ん。」

「うふふ。」

私はあるカフェのほうへ歩いていった。

「これで私の虜にするんだから。」

そう思いカフェに入ろうとしたら突然口を何かで覆われた。

「んふー」

手はつかまれ力が出ない。眠い。

ドサッ

「捕まえた。井上加奈子。」

そんな声を聞きながらわたしは眠ってしまった。

第七話 井上加奈子（後書き）

短くなってしまいました。

次は長くします。（たぶん）

## 第八話 駒

最近、井上さんは元気ない。

何かあったっぽいけど、

ここは何も言わないほうがいい。

傷つける可能性のほうが高い。

そんな私の考えに反して歩美ちゃんは…

「加奈子ちゃんどうした？何か悩みがあるなら相談して。」

仕方ないから歩美ちゃんにくつつく。

「わ、私…」

そう言つて涙を流した。

「二人ともちよつと来て。」

そう言つて連れてこられたのが体育倉庫。

この中学の間ではちよつと有名な告白する所。

「実はこの学校は一種の犯罪組織よ。」

歩美ちゃんも哀ちゃんも狙われている。気おつけて。

今言えるのはこれだけ。これ以上言ったら…」

また涙を流した。

「帝丹男子裏サイト2000kuraiti」

そう言つて教室に戻つてしまった。

「なんか怖いね。」

「歩美ちゃん、今、井上さんが言つたサイト

開かないほうがいいかもね。」

「う、うん。」

「教えるよ。もう俺がこの学校のトップなんだぞ。

沼田亮太。もう一回ブツ飛ばされてえのか。」

そう言つて胸倉をつかんだ。

「江戸川君、でもこれは…」

「お前はもうこの学校のトップじゃねーんだよ。

いいから教えろって言ってるだろう!!」

「管理人専用のパスは2000hurryouだよ。」

「早く言えよ。」

昔のおれだったら頭脳で勝負してたよな。

改めて思うよ、灰原、お前が憎いよ。

そんな事を思いながら部屋をでた。

「江戸川コナン。お前もゲームの駒でしかないのにかわいそうな奴。」

## 第八話 駒（後書き）

オリキャラ登場です。

帝丹裏サイトとは別にあるもう一つの裏サイト。

一体このサイトは？

次回もお楽しみに。

## 第九話 闇は深く（前書き）

前の後書きの謎とけてません。  
すいません。

## 第九話 闇は深く

「私は馬鹿だった。」

真っ白い部屋で少女は言った。

「甘い言葉に騙されて、あなたの事を愛したと思ってた。」  
ベットに座る少年に対して

「ハハハ、今さら？」

顔は笑っているのに、声は冷たい。

「私はあなたの事を愛してなかった。恋に恋してた。」

そう言いながら少女は一筋の涙を流した。

「遅いよ、ユウヒ。もう逃げられない。これがあるかぎり……」

少年は一つのビデオテープを出した。

「っつ。」

「ユウヒ、鼠を捕まえて。このサイトにもぐりこんだ憐れな女に……」  
そう言つて、パソコンの画面をユウヒのほうに向けた。

「馬鹿だよ。まんまと罠にかかってさ……ハハ」

ユウヒは少年をにらんだが冷たい声で

「この子を捕まえてほしいの？」

「ああ。この子は生贄役。探偵じゃないんだ。」

「分かったわ。」

ユウヒは部屋から出ていった。

「あの時と同じ子に思えないな。ハハハ」

乾いた声で言った。

「あいかわずね。」先ほどとは違う少女が来た。

「セシルか。」

少年はニタリと笑った。

「ユウヒ先輩は幹部になるのかしら？」

妖美な声で彼女は少年に近づいた。

「お前も相変わらず性格が悪いな。分かっているくせに。」

先ほどの冷たい声とは違い、凄みのある声で言った。

「クス、まあね」井上加奈子も予定どおり動いてくれたしね。」

少年の隣に座り言った。

「灰原哀、江戸川コナン。あいつらはいったい何者なんだろうな？」

「そうね、戸籍のない二人。面白そうね。」

少年はあきれた声で言った。

「真面目な事なんだが…」

「クス、嘘を言わないでよね。あなたも遊んでるくせに。」

「まあな。」

「じゃあまたね！」

そう言って少女は出ていった。

美しい少女は歩いていた。

ゆくつくりとして、美しいさまで。

周りはざわついていた。

「なんでユウヒ先輩1年の階に来ているんだろうね？」

この学校は学年ごとで階が分かれているので、上級生である人は来ないはずなのだ。

「本当にね。でもラッキーだね。あのユウヒ先輩が1年の階に来てるなんて。」

ユウヒ先輩と呼ばれた少女はそんな話し声に傾ける事なく歩いていった。

ユウヒは1-Aのドアの前で歩みを止めドアを開けた。

## 第九話 闇は深く（後書き）

投稿遅れてすいません。

章を作ったのはこの闇ですべては終わらないので  
分かりやすくするため章を作りました。  
次回もよろしく願いします。

## お知らせ

更新を楽しみにしていた方、すいません。

今の状態だと、この小説が予想以上に長編になり、

物語がぐだぐだになりそうなのでこの小説を消去することにしました。

といっても、リニユールして改稿した『不良と優等生』を投稿します。

その新しい『不良と優等生』を投稿するまでこれは残して置きます。作者の執筆力のなさがこのような事態に発展し本当に申し訳ありません。

いつごろ新しい『不良と優等生』が投稿できるか分かりませんがどうか

この小説を見捨てないでください（笑）

題名は一応変えない予定です。

では、新しい『不良と優等生』でまたお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0554h/>

---

不良と優等生

2011年5月7日16時02分発行